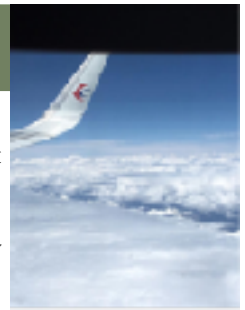
西藏旅行記　1　　幸田　和彦
2019TIBET TOUR



８月２日、西安を飛び立った中国東方航空ボーイング７３７は高度を上げていった。１日の朝出雲を出発し福岡から上海、上海から西安と一昼夜をかけて乗り継いできた空の旅もいよいよ最後のフライトとなった。雲を突き抜けた機体は雲海の上を飛んで行く。今日は朝食も昼食も機内食である。残念ならが口には合わない。気分転換に普段は飲まないコーラを飲んでみるが甘さだけが口に残った。

機内のざわめきに誘われて窓をのぞく。絨毯のように穏やかにたなびく雲海をかき分けるような一筋の割れ目から雪を頂いた山々が現れてきた。横断山脈である。６０００メートル級の山々が連なるこの山脈は長江、メコン川、サルウィン川など幾筋かの大河の源流をなしている。まさにアジアの大水源地帯。V字谷は山頂から谷底までの落差が２０００メートルもあるそうだ。大山の高さがそのまま谷になっているスケール感である。横断山脈を越えるとそこはもう世界の屋根、チベット高原である。西安を飛び立って３時間。いよいよラサ空港へと飛行機は着陸態勢に入った。

この旅での一番の心配は高山病であった。旅行の準備中から旅行中もずっと高山病をきにする緊張しっぱなしの旅となった。下調べでは症状が重いと命に関わる、発症したら高度を下げるしか快復の術はないことも分かった。しかも高山病は高度順応ができていない旅の最初に襲ってくる。ということは、最初に高山病にかかると、旅はもう苦痛以外の何者でもないではないか。ラサ空港に降り立った私は、やっと目的地に着いたという高揚感を感じる余裕もなく高山病に身構えた。

前夜、ツアーガイドの渡部さんから高山病対策を教わった。この渡部さん、世界の辺境の地をフィールドに大活躍されているベテランのガイドさんである。今回の旅も渡部さんが同行してくださるから勇気を出して参加できた。そのくらい頼り切っている渡部さんが「とにかく、ゆっくり歩くこと。呼吸は深呼吸。水分を取ること。それしかありません。」と至ってシンプルな対処法を伝授してくださった。無駄に酸素を使わないこと。そしてとにかく酸素を取り入れること。これが一番の対処法ということらしい。「何十回来ている私でも最初は頭痛や吐き気におそわれます。」ベテランもビギナーも高山病にかかる確率は同じ。対処法も同じだということも教わった。ラサ空港で標高３，５７０メートル、富士山の九合目とほぼ同じ高さだ。高山病になるまいと機内から空港へとつながる通路を深呼吸しながらまるでエベレスト登頂間近のような足取りで歩く我らがツアー一行。その脇を中国人観光客とおぼしき人々がにぎ

週刊 夕焼け通信
VOL.1228
夕焼け通信社
〒699-0825島根県松江市西川津町4276-402
編集　宮森健次　創刊1995年4月25日
E-mail:miyaken@me.com

目次

手作りのくらし２　木幡　智恵美　1
ニュース日記　中村　礼治　2
西藏旅行記　幸田　和彦　4

手作りのくらし２　21　セーター(4)　木幡智恵美

前身ごろを編み直し、後ろ身ごろも何とか編み終えた。我が家のインフルエンザ騒動（これまで罹ったことのない夫や義母までが罹患し、義母は入院する羽目に。これまでに幾度も罹った息子は軽い症状で済んだ）も収まり、雪のない冬が終わろうとしている。セーターが仕上がる頃には、もう暖かくなっているかもしれない。

残るは袖部分。前身ごろと後ろ身ごろに付ける部分が難しい。長さが合わなければ、おかしなことになってしまう。目数を数え、記録しながら編んでいく。編む面積が身ごろほど広くないので、時間はそんなにかからなかった。前身ごろと後ろ身ごろに当てると、何とかうまく合いそうだ。ただ、少し袖丈が短いような気がする。伸びるからいいかと思いつつも、やはり気持ちが収まらない。結局解くことにした。少し長めになるよう編み直す。身ごろに合わせる部分は、目数を記録してあるので、その通りにすればよい。できた片方の袖を、前身ごろと後ろ身ごろに合わせ、息子のセーターにも合わせてみる。長さはこれくらいあった方がよさそうだ。できた片方の袖に時々合わせながら、もう片方の袖も編み上げた。あとは、4つのパーツを縫い合わせるだけだ。

解いては編み、編んでは解きを何度繰り返したことだろう。何とか仕上げることができた。

「大きいんじゃない」と言いつつ、息子がシャツの上から着てみると、ちょうどいい大きさだ。「暖かいねえ」と息子。幾度も編み直して仕上げた甲斐があった。

「俺には編んでくれんの」と傍にいた夫が言うのでこう返す。「前にチョッキ編んでやったのに、あんた座布団代わりに尻に敷いてたでしょ」

息子は家で過ごす時はそのセーターを着てくれた。すぐに暖かくなって、着られる期間は短かったけれど、来年また着てくれるだろう。

ニュース日記　706

中村礼治

世界史の中のトランプ

３０代フリーター　やあ、ジイさん。米中が関税引き上げの応酬をエスカレートさせ、貿易摩擦の形を取った両国の覇権戦争はますます先が見通せなくなった。

年金生活者　東西冷戦時の米ソにくらべると、米中間の経済格差は大きくなく、この戦争の勝敗を予測するのは難しい。

東西冷戦では、経済力でアメリカがソ連をはるかに上回り、その差を核が補っていた。核兵器は１００発持っている側と２００発持っている側との間に大差がない。だから、経済力で劣っていても、核があれば相手に対抗できた。

その核が「使えない兵器」として扱われだしたとき、米ソの経済力の格差はむき出しになり、ソ連は崩壊した。鄧小平はその１０年以上前からソ連の経済的な脆弱さを見抜いていたと推察される。１９７８年から改革開放の名のもとに中国の資本主義化に突き進み始めた。

３０代　いまその成果を中国はフルに使おうとしている。

年金　米ソ首脳が冷戦の終結宣言をした１９８９年、民主化を求めて天安門広場に集まった学生らのデモ隊を武力弾圧できた要因のひとつに、資本主義化の進展によって得られた経済の力があったと考えることができる。その恩恵をいくぶんか受けていた一般民衆はデモの学生たちほど切実に民主化を求めてはいなかったと推察される。

そのあと中国の資本主義化はさらに進み、今ではＧＤＰでアメリカを追い抜くのは時間の問題と見られている。アメリカが中国との覇権戦争の主要兵器に核ではなく経済を選んだのは必然だった。使えない兵器をいくら持っていても勝ち目はない。ソ連を相手に戦っていたときは、使えない核でも軍拡競争をエスカレートさせ、その経済的負担に耐えきれないところまでクレムリンを追い詰める戦略が奏功した。中国にはそれが効かない。

３０代　アメリカは戦後長く世界の警察官を自任してきたのに、トランプのアメリカ第一主義が多くの米国民に支持されるようになった。

年金　背景にあるのは、東西冷戦の終結から米中覇権戦争の開始に至った世界史の新たな流れだ。ソ連の崩壊はアメリカを世界の警察官としての役割から解放する一方、それまでアメリカのヘゲモニーで維持されていた世界の秩序を壊し始めた。ソ連の空白を埋めるように台頭してきた中国は自国流の新たな秩序の構築を要求してアメリカと張り合うようになった。

トランプが金正恩と朝鮮戦争の事実上の終結宣言をしたのは、北東アジアに残っていた東西冷戦を終わらせるためだった。中国との長期の覇権戦争を遂行するには北朝鮮と敵対し続けるわけにはいかない。

それだけではない。中国との戦争に総力をあげるためには、冷戦時代に担った種々の負担から免れる必要がある。同盟国に対する軍事的な負担増の要求も、貿易協定の見直しも、その具体化にほかならない。

３０代　トランプが最終的に目指しているのは何だ。

年金　アメリカが世界で最強の国家として、かつてのようなヘゲモニーを再び握ることだろう。

柄谷行人は近代の世界史をヘゲモニー国家の存在する「自由主義的」な段階とそれが不在の「帝国主義的」な段階との循環としてとらえている。それに従えば、現在は米中両国がヘゲモニー国家の地位を争う「帝国主義的」な段階であり、やがてどちらかがその地位を獲得して「自由主義的」な段階に移行するということになる。だが、国連やＧ７、Ｇ２０だけでなく、多数の国家間システムが世界を重層的に覆い、ヘゲモニー国家の役割の一部を担い始めた現在、この循環が続くかどうかはわからない。

３０代　Ｇ７サミットは「多国間の枠組みに否定的な米トランプ大統領の言動に振り回され、存在感低下を印象づけた」と報じられた（８月２７日朝日新聞朝刊）。ジイさんのいう国家間システムは弱体化しているんじゃんないか。

年金　イラン核合意を離脱したトランプに「適切な条件がそろえば、ロハニ師と会うだろう」と言わしめたのは、Ｇ７という国家間システムの威力だ。

資本のグローバル化は、国家から国家間システムへの権力の分散を促すとともに、その種のシステムを増殖させた。Ｇ７だけでは足りずＧ２０ができたのはその一例だ。そのぶんＧ７の地位は相対的に低下したが、Ｇ７とＧ２０というふたつのＧが合わさって国家間システムは総体として強化された。

それらのシステムはばらばらにではなく、絡み合いながら動いている。今回のサミットでは、Ｇ７がイラン核合意というもうひとつの国家間システムと合わさることによって、アメリカとイランの交渉の機運をつくった。アメリカは離脱したイラン核合意の拘束を受けないように見えたが、そうではなかった。Ｇ７のリングと核合意のリングがこのサミットで重なり、アメリカが抜けてできた核合意の空席がＧ７のアメリカによって埋められる可能性が出てきた。議長国フランスの周到な画策の結果だった。

国家間システムへの権力の分散とシステムの増殖が進んだ世界の現実にトランプはあらがおうとして多国間主義に難癖をつけ